

春秋会

ニュースレター

2026年

2月3月号



3月、4月の予定

・3/24 (火) 15:00~

常議員会

・3/26 (木) 18:00~

春秋会3月総会

2026年大阪弁護士会

会長・副会長当選祝賀会兼新年会

親睦委員 横瀬 大輝(65期)

2026年度大阪弁護士会会長・副会長当選祝賀会兼新年会が盛大に開催されました。本年は中井洋恵次期会長と中森俊久次期副会長が選出され、お二人を祝い、激励する、熱気あふれる会となりました。

田村瞳親睦委員長の開会のご挨拶と次年度幹事長の高江俊名先生による乾杯のご発声で幕を開けた本会。主役の到着を待つまでの間は、恒例のジェスチャークイズからスタートしました。



今年のお題は「接見室から出れない弁護士」「バタコさんに顔を投げられるアンパンマン」、そして「セーフと抗議したら退場させられた監督」など、難易度もユーモアも満点の内容でした。



皆さんお題を完璧に演じ切り、元気100倍のアンパンマンの熱演や激しく抗議する監督の様子に、会場は爆笑の渦に包まれました。

・柳勝久 (61 期、委員長)

・河野雄介

(60 期、担当副幹事長)

・西原 和彦 (55 期)

・堀川 智子 (57 期)

・溝上 絢子 (57 期)

・浦 寛幸 (59 期)

・松尾 洋輔 (59 期)

・広瀬 元太郎 (60 期)

・山田 寛子 (65 期)

・金星 姫 (66 期)

・木場 晶子 (67 期)

・田村 瞳 (67 期)

・板崎 遼 (67 期)

・吉留 慧 (68 期)

・高一 成 (69 期)

・根本 俊太郎 (70 期)

・足立 敦史 (71 期)

・村本 健司 (71 期)

・河野 哲平 (71 期)

・才木 晴幹 (72 期)

・中岡 さつき (72 期)

・中西 教子 (72 期)

・久井 大輝 (73 期)

・佐々木 崇人 (74 期)

・神澤 鈴子 (74 期)

・小林 悠人 (76 期)

・永田 駿 (76 期)

・山口 謙都 (76 期)



会場が温まったところで、いよいよ主役の登場です。女性としては石田法子先生以来 12 年ぶりの会長となる中井先生。「私がしっかりしていると思う人？」と会場に問いかけ、全員が手を挙げるのを見て、嬉しさ反面、半信半疑のご様子でした。次年度のスローガン「誇りを胸に あなたとともに」も掲げ、「愚痴を嫌がらずに聞くので、若手もどんどん意見してほしい」と中井先生らしい包容力のある言葉をいただきました。

続いて、中井先生への花束贈呈を行った石田法子先生。年始の当選祝賀会で中井先生とコートを取り違えてしまったことについてお詫びから始まり、会場は大爆笑。「二人なら新しい景色を見せてくれる」と温かいエールが送られました。



次に中森次期副会長が登壇され、長年憲法や人権をテーマに活動してきたことを踏まえ、「周りの副会長は皆優秀。自分らしく、これまでの経験を弁護士会のために貢献したい」という真摯な決意表明がありました。現副会長の河野豊先生からは、予算と職員には常に配慮するようにと、かなり真剣(ガチ)なトーンのアドバイスが送られました。



歴代会長や重鎮の先生方からも、愛のこもった激励が続きました。宮崎誠先生から「中井先生のキャラとやり方で」、山田庸男先生からは「裏表なく、二人は春秋会らしい人物」、金子武嗣先生からは「会長は日弁連もあり半分いない。副会長で回して!」といった激励のお言葉をいただきました。山口健一先生からは「二人はいいコンビ」、

福田健次先生からは「言うべきことは言ってくれる。議論では中森先生がトップの気持ちで」と、お二人のコンビネーションに期待が寄せられました。



また、森野俊彦先生は「2人はしんどい、難しい選択肢を選んだ」、岩本朗先生からは「中森先生は大概のことを『楽しい』と言う」と、お二人の選択やお人柄を称えるお言葉をいただきました。さらには、バタコさん、もとい上出恭子先生から、「中森先生が事務所業務をできなくなっても事務局にボーナスを払えるように支えて欲しい!」と、切実な想いが語られ、会場は爆笑に包まれました。



最後に、幹事長の黒田愛先生から「中井先生は easy-going でどんな意見も受け止めてくれる、中森先生は任されたと思って好き勝手にやって」と激励の締めのご挨拶がありました。



会の全体を通じて、参加者全員がお二人を大好きで、お二人への熱い思いと、それに全力で応えてくれるお二人の人柄がにじみ出る素晴らしい船出の会となりました。

以上

政策委員会企画

「委員会活動のこれからを語ろう」

が開催されました

政策委員 谷口 真由(77期)

2026年2月5日、大阪弁護士会館にて政策委員会企画「委員会活動のこれからを語ろう」が開催されました。当日は、23期のベテランから77期の若手まで、幅広い層にご参加いただきました。特に、参加者30人中14人が70期代と、若手の比率が高めで、自由闊達な議論がされました。ご参加いただいた皆様、ありがとうございました。



まずは、基調報告として、岩本朗先生より、大阪弁護士会の委員会の現状についてご報告いただきました。現在、会則上の委員会から特別委員会、プロジェクトチームまで、その数は約76にも及びます。大阪弁護士会会則によると、その中には、資格審査会、懲戒委員会、綱紀委員会といった弁護士法の規定上設置義務のある、弁護士自治に直結するような委員会とそれ以外の委員会、あるいは、会則の委員会と特別委員会といった分類がされること、それぞれの違いについて説明されました。また、大阪弁護士会には、企画調査室、法規室といった、有償の嘱託弁護士が置かれる「室」と呼ばれる制度があること、「室」は有償の嘱託弁護士が勤務する一方で、委員会で行われる業務は無償であることの問題提起がされました。大阪弁護士会に所属して約1年が経ちますが、所属していてもまだまだ知らないことが沢山あり、大阪弁護士会の組織について理解を深めることが出来ました。



また、豊川義明先生からも、基調報告として、「弁護士と委員会活動の生成と発展」というテーマでご報告いただきました。昭和24年6月の弁護士法施行の時から、弁護士法1条は「弁護士の使命」について規定されており、「弁護士」というのは「法の支配」の担い手としての1つの機関であること、弁護士法成立以降の委員会活動の歩みをお話いただきました。人権、公害、消費者問題など、時代ごとの社会的要請に応える形で委員会が生まれ、発展してきたこと、また、委員会活動を通じて弁護士は広い視野、仲間が出来ること、弁護士会としての取り組みが社会運動につながる事等、弁護士会にとっての委員会活動の重要性について共有されました。豊川先生の経験も踏まえたお話は非常に説得力があり、後のグループディスカッションにつながるお話でした。

今回の企画で重視されていたグループディスカッションでは、各グループで活発な議論のうえ、全体に意見が共有がされました。



委員会活動に参加する理由、委員会活動の魅力として多く出た意見が、「人とのつながりができる」という点でした。利害関係に関わらず同じ方向を向いている人と出会うことが出来る、仕事で困ったときに頼れる人が出来る、という意見は多くみられました。また、専門性を高めることが出来る、委員会活動では業務では体験できない経験が出来るという魅力もありました。一方で、委員会活動へ参加できない理由として、業務で忙しく物理的に委員会活動に参加することが出来ない、時間と手間がとられる

ので行きにくいという意見が挙げられました。その他、世代間、特に60期代以降の世代と、それ以前の世代に価値観の相違が大きいのではないかと、委員会はオンラインでの開催が良いのか、現地の開催が良いのか、運営方法はどうか、といった意見が挙げられ、全体でも意見交換がされました。

委員会活動への参加を促進するための方策として、新人だけでなく、中堅層への勧誘を積極的に行う、会議の運営方法や委員会の運営方法を見直す必要があるという意見が挙げられ、また、そもそも全体の会務の量を見直す必要があるのではないかと問題提起もありました。委員会活動の有償化については、有償化したからといって必ずしも委員会活動に参加する人が増えるわけではないという意見が多い一方で、負担感を減らす、公平感を保つためには一定の委員会活動は有償化すべきではないかという意見が挙げられました。また、現在の公益負担金については、現在の6万円という金額では負担の平たん化はされていない、強制的にでも委員会活動をする人を増やすには公益負担金を増額すべきという意見も挙げられました。

今回の企画を通じて、委員会活動は「弁護士自治」を守るための大切な基盤であること、弁護士会を存続していくことの重要性についての理解が深まりました。また、そのためには委員会活動はどうか、現状についての意見交換も踏まえ、活発な議論がされ、今後につながる意見が多く共有されました。

企画後に行われた懇親会でも議論は続き、大盛況の企画となりました。



政策委員会では、今後も様々な企画を開催しますので、ぜひご参加ください！

以上



～兵庫県：A病院～

広瀬元太郎（60期）

謎めいたタイトルで困惑されたかもしれない。今回は、筆者の入院日記である。入院患者にとって、病棟は周辺社会と隔絶されており、その環境は島と酷似しているのが、完全にこじつけではあるが、島巡り第19回とする。

ヘルニアという語句がある。交通事故事件で既往症だとか、訴因減額だとかでもめるやつである。ヘルニアとは、ラテン語で「脱出した」「突出した」という意味で、医学的には臓器が本来あるべき場所から脱出している状態をさす。交通事故でよくでてくるヘルニアは、椎間板ヘルニアである。脱出が鼠径部（足の付け根）に発生するものを鼠径ヘルニアという。鼠経ヘルニアは、脱腸と俗称されているが、必ずしも腸が出ているわけではない。

筆者の体に鼠経ヘルニアが発生したのがいつなのかはよくわからないが、2025年の2月の終わりころ、それを発見した。その日、風呂から上がった後、裸で布団のうえに転がっていた（注：そういう趣味は無い。たまたまその日は、そうしただけである）。なぜかわからないが、唐突に腹筋運動をしたくなり、それを行ったところ、上半身を上げたときに左下腹部が高さ3センチくらい膨らんでいるのを発見した。その膨らみは、寝転がると消え、上半身を上げると発生する。なんだこれは？と思ったが、その時は軽く流した。

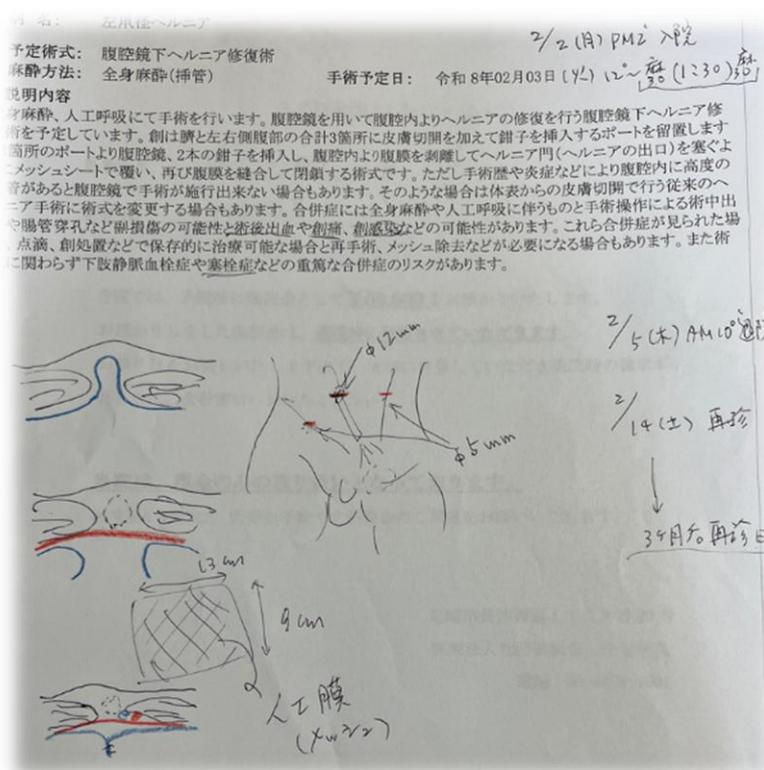


【地理院地図】

今まで、左鼠径部など気にもせず生きてきたが、一度気になりだすと観察をしたくなる。どうやらこの膨らみは、立つと発生し、横になると消滅するという規則性があることが判明した。大腸がんとか前立腺がんとか、重病の可能性もあるのでネットで調べまくったが、鼠経ヘルニアの症状と完全に合致しているようだ。鼠径部には筋肉の弱いところがあり、そこに体質上若しくは加齢を原因として隙間ができる。そして、その隙間から腸が脱出する状態になっていると思われる。鼠経ヘルニアで検索すると、いつかの過払金ブームの法律事務所のように、「ヘルニア日帰手術」の宣伝がヒットする。過払金のそれと同様に、煽るものから真面目なものまで玉石混交である

が、概ね言いたいことは「①自然治癒はなく、手術を要する。②緊急性はないが、放っておくと脱出した腸が戻らなくなり（嵌頓（かんとん）という症状）、死ぬほど痛いし場合によっては死ぬ」とのことである。

緊急性がなく痛くもない病気（そもそも病気なのかも怪しい）への対処速度は遅く、A病院でCT検査を受けたのは、すでに5月のことであった。CT検査の結果、やはり鼠径部ヘルニアであった。手術でなければ治らないこと、嵌頓になると危険という点については、ネット情報と同じであった。ネット情報と異なることは、筆者の場合、脱出しているのは腸ではなく内臓脂肪であること（但し、放置すると腸が出てくる）、日帰手術は、やろうと思ったらできるけど、全身麻酔かけるので手術当日はふらふらですよ。うちは、最低でも2泊3日はしてもらうことにしているとのことであった。そして、「手術は急ぎませんので、する気になったら来てください」と言われて終了。



筆者は幸いにも、人生において手術も入院も経験したことがなかった。ネット情報では、「鼠経ヘルニアの手術は、全ての手術で最も初歩的な手術なので心配ない」というが、たとえ

確率的に低くても、その一回にヒットしたら嫌である。ということで、問題を先送りにしてしまった。

それから、夏、秋を経て、ゴルフに行ったり北海道の大雪山に登山したり活発に活動をしたが、やはり頭の隅に、恐怖の「嵌頓」になったらどうしよう？ゴルフ中なら大騒ぎになるだけで済むが、大雪山の頂上で腸が戻らなくなると死ぬのでは、などという意識は常にあった。しかし、さらに先送りは進み冬がやってきた。認めたくなかったのだが、どう考えても、鼠径部のふくらみは、最初の発見時より大きくなっているようだ。そのころから、爆弾を抱えての生活から訣別したいとの思い、どうせ手術をするなら早い方がいいかなという気持ちが高まってきた。そして、今年の1月3日、前回の島巡り記事（伊吹島）の帰りの船で、初めて患部に痛みが走った。痛みの時間は5分ほどで程度も軽かったが、医者のない島で激しい痛みが発生するこ

との恐怖を痛感した。往生際が悪いことに、この段階でも手術を決断できずにいたが、正月休み明けの1月6日の工作中、再度痛みが走った。明らかに、伊吹島の時よりも痛い。発見から約1年、腹をくくらないといけない。

1月13日、「手術したいのですが」とA病院を訪ねた。医師は「それはいい判断だ」と言い、あっという間に手術の日程が決まった。入院は2月2日(月)から2月4日(木)、手術は2月3日。筋肉の隙間(ヘルニア門という)にメッシュを縫い付け、脂肪や腸が出て来ないようにする。全身麻酔をかけ、腹腔鏡で手術をするとのことである。メッシュの大きさは、縦9センチ横13センチとのことである。思いのほか大きい。

1月17日から18日にかけて、広報委員会の取材で能登半島に行った。旅行先で、広報委員会のメンバーに入院と手術のことを告げた。そこで、ある広報委員の家族が、腹腔鏡による鼠経ヘルニアの手術をしたことがあるらしく、「手術後ずっと痛いといっていましたよ」との報告があった。手術そのものにはばかり気をとられ、手術後のことを考えてなかった。え～、そんなにいつまでも痛いのか。おそろしいことに、退院日2月4日当日の午後、交通事故紛争処理センターのあつ旋期日が入っている(筆者は、同センターのあつ旋委員である)。他人の交通事故のあつ旋などしてる場合なのか不安になってきた。

1月24日、手術前の検査ということで、A病院に出頭。心電図と肺活量の検査をする。



腸が脱出するという消化器系の手術なのに、心電図とか肺活量とか何の関係があるかと質問すると、全身麻酔に耐えられるかの判定に使うとのことである。心電図は問題なかったが、肺活量の検査で、吸った息を全部吐き出すタイミングが難しく、成績が悪かった。

「肺年齢96歳」とか判定が出ており、全身麻酔の途中で呼吸が止まったりしないのか。医師にその点を聞くと、「肺活量の検査はタイミングが難しく、肺年齢とかほとんど気にしないでいい。登山が普通にできる人

が、肺年齢96歳のはずないから、ははは」とのこと、だったら検査の必要があるのかと素朴に思う。



いよいよ2月2日、入院の日がやってきた。13:30に病院に出頭することが求められている。筆者は、殊勝にも午前中事務所に出勤し、もし麻酔から覚めなかったら困るので、事件ごとの進行状況などを表にまとめたりした。12時ころ事務所を出発、今後病院食が続くだろうから、梅田で高めのハンバーグランチを食べる。入院中の着替えとか、暇つぶしの本とかPCとかをキャリーバックに詰める。入院なのだから、

自宅からA病院にはタクシーで行こうと考えていたが、直前に金がもったいなくなり、阪神バスで病院に向かうことにした。バスをおりて、キャリーバックを転がして病院に行くのだが、旅行のようで病人とは思えない。

病院の受付で手術の同意書等いろいろな書類を渡す。同意書は、おそらく弁護士が原案を作ったのであろう、様々なリスクが細々と書かれてある。筆者に不測の事態が発生し、病院を訴えた場合は、これらの書類が乙号証として提出されることは相違ない。

病室に連れていかれる。病室は208号室、208号室だが4階である。同室者に気を使うのが嫌なので、個室を奮発した。個室料金は一日7,700円である。ホテルと違って、泊数で計算するのではなく、日数で計算するので、3泊4日は $7,700 \times 4$ で30,800円となる。病室は思いのほか広く、アパホテルのシングルルームの2、3倍はあるように思える。救急車で担ぎ込まれたわけでもなく、バスに乗ってキャリーバックを引っ張って来たので、ホテルにチェックインするような気分ではあるが、ベッドの枕元には「2/2 20時以降絶食絶飲」とか記載された札がかかっており、病人であることを痛感させられる。とはいえ、まだ午後2時なので寝る気にもならない。

ほどなくすると、担当の看護師がやってきて、入院生活の心得についての説明が始まる。驚いたのは「手術日以外の日については、4階の廊下を歩行する許可を与える」「手術日は、どの時点で歩行許可を与えるかは、追って通知する」とのことである。つまり、入院中は4階から出てはいけないし、手術日は208号室から出てもいけないということなのだ。コンビニとかに買い物に行ったり、最悪でも、病院の敷地内をうろつけると思っていた筆者



は衝撃を受けた。そして、ひも靴を履いていることを指摘され、「それは禁止されているので、ひもの部分にテープを巻かせてもらう」ということになった。所持している薬を申告させられ、一旦全部没収、病院で管理するとのことのお達しがなされた。4階から出るためには、ナースステーションの前にあるエレベーターを使わなければならない、エレベーターは常に監視されているので、4階から出ることはできない。自分が、拘禁状態にあることを知った。さらに、4時までにシャワーを浴びること、シャワーの時間は30分以

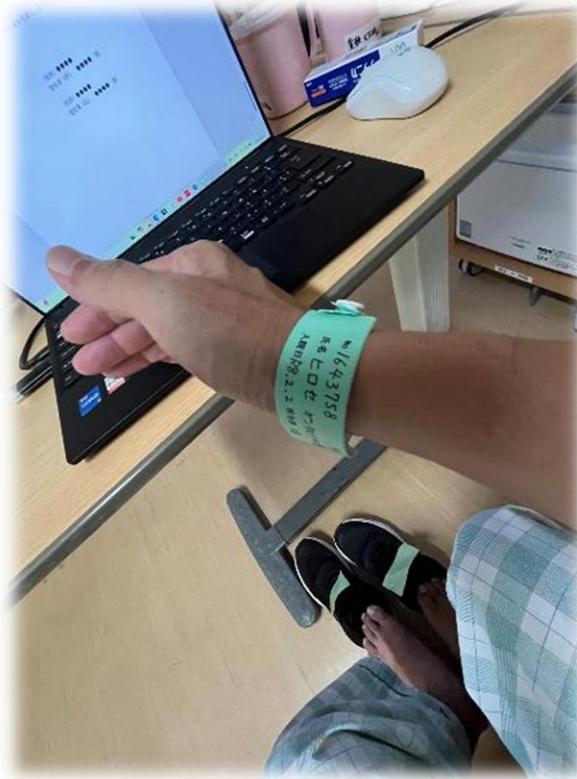
内とせよと告げられ、気分は拘置所である。

シャワーを終えると、担当医がやってきた。昨年5月にここに始めて来た時の医師であった。簡単な説明の後、左手に消えないインキで印をつけられる。患部が左側ということを示すための表示である。ゴールデンカムイに出てくる網走刑務所の囚人のようである。作業は流れるように進み、右手首に識別表のような輪っかが装着され、左腕に点滴用のプラグ（毎回針を刺さなくてもいいように、注射針を刺したままにしておいて、点滴を替えるたびに管を差し替えるしくみ）を付けられる。「ほんとうにきれいな血管ですよ」と褒めてもらえる。このような褒め言葉は、病院外の社会ではあまり用いられず、やはり、島のような特殊な環境に入ってきたことを感じさせられる。午後6時台という、昨日までなら考えられなかった時間に夕食が出てくる。病院は、早寝早起き、早食事でスケジュールが組まれる。日本国とは+1時間の時差があると考えるとちょうどよい。そして、予想通りの病院食が終わると絶食期間に入る。2日後の朝食まで、何も食べられない。

2月3日、手術の日である。病院の朝は早い。6時過ぎに、体温、血圧、血中酸素濃度の測定。夜勤が終わって看護師が変わりますとの挨拶。ゴミ箱のごみを回収に来る人、ベッドの上の埃をコロコロでとる人、次から次へとRPGゲームのようにいろんな人が挨拶しては入室してくる。医療とは、労働集約産業なのだということが痛感される。昨晚から、左腕には点滴がつながっており、読書やスマホがやりにくくなっている。手術までは、拘置所（4階）の廊下を歩くことを許可されたので、点滴を引っ張りながら廊下を3周くらいする。すでに、昨日から8周くらいしており、掲示物はほとんど読んでしまった。手術は12時から始まる。もし麻酔が醒めなかった場合に備えて、妻と打ち合わせをしたいのだが、面会時間は14時から16

時までなので、面会は不可らしい。面会は不可だが、手術直前に手術室横の家族待機室のみで面会ができるらしい。ますます、拘置所度が高くなってきた。

ヘルニアになっていること以外、基本的には健康体なので、歩いて手術室に入り、自分で手術台に寝転がる。麻酔医の説明によると、昨日から付けている点滴のプラグから第一の麻酔薬を注入する。そうすると気を失うので、気管に管を直接入れて、第二の麻酔ガスを吸入する。第二の麻酔ガスが、本格的な全身麻酔とのことである。気管に管を入れられるのは怖い、寝ている最中なのでいいか。



全身麻酔が効く瞬間には以前から興味があった。経験者の話には、いきなり記憶が飛ぶというものから、ちょっとは声が聞こえるというものまで多様であった。極力意識を維持し、麻酔が効く瞬間を体験したい。手術台に寝転がって1分くらいで、誰かが「それでは麻酔入れます」という。その直後、点滴の管から、ちょっといつもと違う物質が入ってきた感覚があって、記憶が消失した。

次の瞬間、ベッドで運ばれている自分に気づいた。手術が終わっていたのだ、膀胱にバルーンを入れられているらしく強い

残尿感を感じる。頭がもうろうとしているが、徐々にはっきりしてきた。妻が横に立っている。手術前と同じ外見である。麻酔から30年醒めず、目が覚めたら妻が90歳になっているという事態を何度か想像したが、それはなかったようだ。次に、記憶を失っていないかの確認をしないといけない。確か、今日の午前中は株価が急騰していたはずである。「株はまだ上がってるの」と妻に聞いたら、午前中よりもっと上がったとのこと、その後持っている銘柄を思い出してみたらちゃんと記憶していた。今にして考えてみると、覚醒の第一声が株の話とは、お金の亡者のようである。



おそらく、強力な痛み止めを打っているようで、痛みは全くない。手術は2時間かかったようである。起きていたような寝ているような時間が流れ、筆者にとっては一瞬で1時間以上が経過したりして、面会終了時刻になったので、妻が退出させられる。さすが拘置所、厳格である。

手術経験者のブログ等によれば、一番つらいのは手術日の夜らしい。痛くて全く寝れないとの報告もあり強く危惧していたが、痛みはほとんどなかった。ただ、麻酔も含め昼間に寝す

ぎたため、眠れなかった。痛みというよりは、お腹が張っている感覚が続いた。腹腔鏡手術は、手術の空間を確保するためにお腹に空気を入れて膨らませてから手術をするそうであるが、その影響かもしれない。

2月4日、やっとご飯が食べれる。復活最初の食事は、通常の食事とは異なる術後用の食事で、味の薄いおかゆと野菜と牛乳である。久しぶりの食事であるにもかかわらず、まずいし少ない。でも完食する。食事が終わるとやることがない。暇だろうと思えば本を持ってきたが、思いのほか読む気が湧かない。平日の午前中のテレビは死ぬほどつまらない。自分の点滴と天井の模様を見続ける時間が続く。

今日のイベントは、広報委員等の弁護士が見舞いに来ることである。入院してから48時間も経っていないが、弁護士をしていたのがかなり昔のような気がしており、同業者と会話するのはうれしい。ただ、問題は彼らがここまで到達できるかである。面会者は身内に限ると案内には書いてある。入院前は、「身内」というような定義の曖昧な条件などどうにでもなるわ、と安易に考えていたが、ここの運用は極めて厳格だ。はたして、突破できるだろうか。

若干の交渉は必要であったが、業務上面談しての打ち合わせが必要（笑）ということで看護師長の許可が出て、彼らは厳しい門番を突破してくれてくれた。一般的に社交辞令になりがちな、「お見舞いに行きます」であるが、ほんとうに来てくれたことに感激する。たかが4日の入院であるが、外部との接触がこんなにうれしいとは。刑事事件では、接見にはきちんと行くことにしないといけない。彼らは、お菓子と苺を持ってきてくれたが、見つかると没収されかねないので注意する必要がある。



2月5日、いよいよ出所の日である。朝、医師が手術痕を確認して、退院の大丈夫だといってくれる。この段階まで恐れていた痛みはない。出所は午前10時である。妻が、荷物を運びだすのを手伝いたいから208号室に行きた

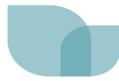
いと門番に言ったところ、面会時間でないと拒否されたいらしい。最後の最後まで厳格だ。その代わりに、看護師が荷物を運んでくれる、家族に持たせた方が、仕事が減るのに。入院費と手術代を支払う。9万円であった。そのうち、差額ベッド代が3万円なので、治療費は6万円である。さらに、医療費控除で税金を3割くらい下げることがあるから、実質的には4万2千円。最近、選挙等で日本の国力について、ぼろくそに言われているが、これだけの手術が4万2千円でできることは誇るべきである。

かくして筆者の入院生活は終わった。回復は早く、退院当日の午後には、自転車で乗って交通事故紛争処理センターに出勤し、あっせんをした。入院と退院の慰謝料の表が少し実感をもってくる。翌週には飲酒も解禁し、全くの暮らしに戻った。

2月14日、手術後の状況確認のため病院に出頭した。医師は、入院前の生活に戻って大丈夫、登山でもゴルフでもなんでも可とのことであった。

もうしばらくこの病院に来ることはない。あの時は一刻も早く脱出したかった病棟であるが、今や懐かしくも感じる。診察室の横に階段があり、懐かしい4階につながっている。筆者がその階段を眺めていると、係員に「外来の方は入れません」と注意された。相変わらず厳格である。帰りに外から4階の208号室の窓を見た。あのころ、早く出たいと外ばかり眺めていた窓の向こうの病室は、今や入ることができない禁断の領域になってしまったようである。

【終】



犯罪捜査・謎解きゲーム企画のご報告

親睦委員 森田 愛鈴奈(77期)

令和8年3月5日(木)、今年度最後の親睦企画「謎解きゲーム企画」が開催されました。今回使用されたゲームは、SCRAP 犯罪捜査ゲーム DETECTIVE CASE FILE#2「ブラックローズ」というもので、本当にあった事件について、探偵として捜査しているような気分になる、本格的なゲームでした。

今回は約20の方が参加され、4チームに分かれて謎を解くスピードを競う形で行われましたが、弁護士だけでなく、ロースクール生や事務職員の方も参加されるなど、普段お会いしたことがない方とも協力して謎を解くことで、打ち解けることのできるとても良い機会になりました。



レンタルスペースで開催され、たくさんの美味しい食べ物、飲み物が取り揃えられていましたが、普段たくさんお酒を飲まれる方も、お酒を飲むことを忘れるほど集中されていて、時にはチーム全員が立ち上がって謎を考えたり、手がかりとなりそうなメモを真剣に見つめて静かになったりと、各チームが本気で謎を解いている様子でした。

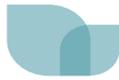
謎解き自体もとても奥が深く、一つの謎を解決すると、また新たな謎が出てきて、それを解決するというようなしくみで、謎を解けば解くほど、どんどん面白くなっていきました。また、犯人が犯罪に手を染めてしまった理由について記された手紙を読んで、「まさかこの人とこの人がそんな関係だったのか」と知ったり、エンドロールになってから、「あの時のあの写真はそういう意味の写真だったのか」と気づくことがあったりと、最後まで驚かされることばかりで、3時間という時間があっという間に過ぎてしまいました。



時間制限はあったものの、最終的には、何とか、4チーム全員が最後まで謎を解くことができました!チーム全員で協力して、ずっと分からなかった謎が、ふとした誰かの発言で別の誰かが何かに気づき、その気づきから、また別の人が何かの謎に気づくなど、チームワークを駆使して謎が解けたときは、本当に達成感がありました。

謎解きゲーム企画を考案いただき、運営いただいた親睦委員の先生方、誠にありがとうございました。来年度以降も、ゲーム企画が開催された際は、ぜひ、多くの方にご参加いただき、謎を解けたときの達成感を味わっていただきたいと思います!

以上



執行部だより

「かいほ」とはなにか

会計担当 副幹事長平林 佳江子 (67期)

2026年2月4日、2回目の拡大執行部懇親会(副幹事長と各委員会委員長と嘱託が参加)が開催されました。場所は、黒田幹事長のセレクトで、OSTERiAGO(オステリアーゴ)というつば公園に面しているイタリアンレストランで、皆でとても楽しい時間を過ごしました。私は、この日は何となく胃の調子が気になっていてお酒はやめておこうかなと思っていたのに、出てくるワインがどれもとてもおいしそうで、結局、スパークリングから、ロゼ、白ワイン、赤ワインまですべて飲んでしまいました。

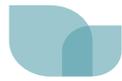
懇親会の様子からも分かるように、今年1年、執行部の先生方をはじめ、とても良い出会いがあったなあというのが、副幹事長を務めての率直な感想です。1年前、会派とは何かも分からないまま、黒田幹事長にお声がけいただいて、今年度の執行部に入りました。正直に申し上げますと、1年間の任務を終えつつある現在においても、会派とは何かは今一つよく分かっていません。明確な答えが難しいなというのが率直な感想です。親戚の集まり…という言葉も聞きましたが、それも少し違うような。今年は会長を推薦する年だったので余計にそう思うのかもしれません。会派は目的(政策)に向かって進むという意図があり、生存確認と、噂話と、おしゃべりと食事を楽しむという目的のみの親戚の集まりと一線を画するな、と思うところです。ただ、会派に行けば知り合いが増え、人脈が広がる場であることは確かであり、間違いがありません。

最後に、やはり若手にどうやって会派の活動に関わっていただくのか。これが春秋会の大事な、そして最大の課題かなと感じています。今年1年、幹事会、選考委員会、そして総会を含む各主要なイベントに出席をしてきましたが、やはり若手の参加が極めて少ないと感じました。引き続き、若手に会派は人脈作りの重要な場であると思ってもらえるような会運営が求められていると思います。

皆様、1年間、本当にお世話になりました。ありがとうございました。



以上



あしがき

広報委員会では、会員の皆様から原稿を大募集します。ぜひ、ご連絡ください。

- 1 今までのニュースレター・会報の記事に対するご意見
- 2 子育て体験談
- 3 変わった国に行った旅行記
- 4 ペットや趣味の紹介
- 5 感動した本、マンガ、ゲームの紹介

などありましたら、以下のアドレスにご連絡ください。

広報委員長 柳 勝久 sj-koho@ml.osakaben.or.jp